

農林水産大臣賞を受賞された生産者を訪ねて(その1)

(公財)日本豆類協会

山形県西村山郡河北町の株式会社奥山農園代表取締役奥山喜男さん(74歳)は、令和7年には60.7haの耕作面積で、水稻43.0haを中心に大豆12.3haとメロン(施設)等に取り組み、周年農業を実践されています。茨城県筑西市の有限会社山善農園代表取締役杉山善昭さん(41歳)は、令和7年には127.2haの耕作面積で、水稻62.3ha、小麦47.0ha、大豆50.7haを組み合わせた輪作を行っておられます。

第54回全国豆類経営改善共励会(主催:全国農業協同組合中央会、株式会社日本農業新聞)では、奥山農園が過去3年平均306kg/10a(県平均139kg)の単収と上位等級(1・2等)97%を達成していることが評価され、また、山善農園が同じく、県平均(111kg/10a)よりも顕著に高い183kg/10aの単収と上位等級比率95%以上を達成していることが評価され、大豆家族経営の部においてそれぞれ農林水産大臣賞を受賞されました。

日本豆類協会では、令和8年7月14日に奥山喜男さんを、7月27日には杉山善昭さんを訪ねて、直接いろいろなお話をお聞きしましたので、ここではその時のインタビューの概要をお伝えします。

お忙しい中にもかかわらず、奥山さんと杉山さんには貴重な時間を割いてご対応いただきました。また、山形県村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課普及指導員の遠藤祐さん、茨城県県西農林事務所経営・普及部門(筑西地域農業改良普及センター)主任の稲葉大貴さんには、日程の調整や当日の対応にご協力いただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

共励会の概要は、本号の別稿「第54回全国豆類経営改善共励会の結果について」をご覧ください。大臣賞を受賞された白馬照泰さんとJAこしみず豆類対策委員会については12月号で報告します。

● 1 株式会社奥山農園 代表取締役奥山喜男さん ●

当日は奥山さんの御自宅でお話を伺いました。

【大豆作りへの思い】

奥山さんは、大豆を作るからにはしっかり穫って収入を得ると心を決めて

いと語られました。地域の農家から農地を借り受けて規模を拡大しても、絶対に手薄にならないように心がけていること、どのほ場も適切に管理できるよう、今までの経験をもとに、どの時期に何をすればよいのかを考え、ちょっとした手間暇を惜しまないことが肝要だと強調されました。



大豆作りへの思いを話す奥山喜男さん

面積をこなすことだけを考えるのではなく、ちゃんとしたものを作ってこそ、農地を貸してくれる人にも安心してもらえる、そういう気持ちで、草刈りや農道整備なども奥山農園が率先して行うとのこと（実際、担い手の減少が進む水稻単作地域において、地区の農地のほぼ全てを担っておられます）。

【水への感謝と思い】

この地域は、月山・朝日連峰を水源とする寒河江川のきれいな水が常に流れていて、水に恵まれているそうです。取水口が高い位置にあることから、自然流下方式により水を引き込むことができコストがかからず、夏でも冷たいこの水を生かして、花が咲く時期など必要なときにはうね間灌水を行っておられます。

お話を聞くなかで、大豆は適期に播種しないと十分な収量を得られないと繰り返し指摘されていました。以前、播種時期に雨が降らない年があって、奥山さんは週間天気予報を注視しながら、ほ場に溝を作って水を流し土壌に水分を与え、播種をしたところ、発芽が揃い、十分な収量を確保できたそうです。発芽にバラツキが出ると収量・品質に影響することを実感したと語っておられました。

また、「里のほほえみ」のほか豆乳需要のある秘伝豆を約4ha栽培しておられますが、両者は水の扱いが対照的で、「里のほほえみ」は灌水するのが良いのに対して秘伝豆は灌水すると立ち枯れ症状を起こしやすいため水持ちの良いほ場で栽培するのが大事とのことでした。

【ブロックローテーションの実践、発酵鶏糞の施用】

奥山さんは水稻と大豆のブロックローテーションを継続的に実施し、地力

の維持に努めつつ適期・適作業を徹底しておられます。ブロックローテーションにより、雑草被害を軽減できるほか、大豆作後の水稻は化学肥料が半分で良くてコストを低減でき、さらに収量が上がり、品質も良くなると力強くお話になりました。4年前の肥料高騰のおりには、ずいぶん助かったと実感されたそうです。

また、大豆作には以前より宮城県の採卵鶏由来の発酵鶏糞を施用されています。このような、土づくりを重視して栽培されている点が他のほ場とは異なり、県の試験場の研究員から、奥山さんの大豆は、根粒菌の働きを十分に生かした栽培がなされていると言われたとのことでした。

【大豆作りの課題】

大豆作りの課題として、天候に左右されやすいこと、特に播種時期に雨が降ると作業ができないこと、連作障害が出やすいこと、そして雑草なかでも帰化アサガオ類を防除することが難しいことを挙げられました。これらの課題に対して、経験知をもとに克服し、将来に向けて持続可能となる経営を行いたいと話されました。

【今年（令和8年）の大豆の生育状況】

今年の大豆は、播種時期に降雨が続いたものの適期（6月初旬）に播種ができ、生育は順調とのことでした。訪問した日はちょうど今年2回目の中耕培土の作業中でした。

奥山さんは、表彰式には「何事も経験」と



今期2度目のトラクターによる中耕培土作業



昨年大豆を栽培したほ場の水稻（よく管理されていて生育は順調）



大豆の生育は順調（この日はあいにくの曇りで月山は見えなかった）



ベニバナ（トゲ）に苦勞しながら種を取り出す奥山さん

考え社員も一緒に出席されたとのことで、当日は全国の志を同じくする人たちが集まって情報交換できたのは自身にとって、また、社員にとって貴重な機会であったと述べておられました。

● 2 有限会社山善農園 代表取締役杉山善昭さん

当日は山善農園さんの事務所でお話を伺いました。

【大豆の品種への思い】

今年（令和8年）作付けした大豆の品種を伺ったところ、「里のほほえみ」と「リュウホウ」をやめて、「そらみずき」30haと「納豆小粒」20haに絞ったとのことでした。「里のほほえみ」は雨が少ないときには発芽が揃わなくて初期生育がうまく確保できなかったこと、「リュウホウ」は地元豆腐店からの要望があって作っていたものの、そのお店が廃業してしまったことが理由です。実需者からは「里のほほえみ」のニーズはあるものの、安定的に供給できることに重きを置きたいということでご理解いただいたそうです。その一方で、「そらみずき」については、高温・乾燥条件下でも安定した収量が期待できることに加え、着莢位置が高く収穫効率に優れる点を高く評価しておられました。また、自らが先行して良い成績を示すことで、新品種への切り替えをためらっている生産者の後押しになれば良いと話されていました。



山善農園事務所にてインタビュー（手前が杉山代表、奥が稲葉主任）

【労働環境の整備】

従業員の労働環境では、自然と生き物を相手にしている以上、どうしても仕事に出なければいけないこともある一方で、休めるところではしっかり休めるようにしているとのこと。また、本人のキャリアアップのために、作業の項目と内容を一覧にした表を作成していて、面談の際にこの表を用いながら、どこまでできているか、どこができていないかを見える化して話し合い、お互いに納得を得るようにしておられます。

また、高い収量が穫れて儲かったら従業員に還元するよう心がけていて、どれだけ穫れたかなどのデータも共有しているそうです。このことにより、

従業員は自分たちの努力が収量、品質に結びつくことを実感し、なぜ今がんばらなければいけないのかを理解できるとのことです。

このような取組が従業員からの主体的な行動につながっているとこのことで、水田280枚、畑100枚について、作業の優先順位付けや実施する順番の判断など、現場からさまざまな提案があるのは嬉しいことだと話されました。



豆播種機(手前は片溝切りカッター)

【地域の仲間との連携、研鑽】

この地域でも「そらみずき」に取り組む仲間が出てきており、そうした仲間達と一緒に、大豆の実需者の工場見学に行く計画を立てていることを楽しそうに話しておられました。令和7年2月に農林水産省で開催された「大豆多収新品種『そらしリーズ』に関するシンポジウム」で一緒になった実需者の代表に、いつか工場見学に行きたいと申し入れしていたものの、自分ひとりでは先方に申し訳ないかと躊躇していたところ、地域で「そらみずき」に取り組む仲間が出てきたことでようやく行ける環境が整ってきたと考えられたそうです。地域の仲間達と一緒にいろいろな所に研修に行ってトップクラスの生産者本人の考えを直に聞くこと、それを次の世代へ伝えることが重要だと述べられました。

【自分の強み】

強みは何かとお聞きしたところ、ブロックローテーションの中で、水稻と小麦・大豆の輪作を行っていること、これにより、雑草や連作障害がリセットされることを挙げられました。また、最近でこそ殺虫剤の散布回数が増えたものの、もともと害虫の被害が少ない地域であるということも有り難いと話されました。そしてこの強みを生かすために排水対策、特に明渠を徹底し、適期に播種することを大事にしておられます。

【今年の生育状況】

今年は適度に降雨もあり6月23日から始めて7月11日までに播種を終えたそうです。そして、生育は順調で期待できるとのことでした。この20日間あま

りの播種時期の違いが収量に影響するのか、また、これまでの数年間の極端に暑い夏でも「そらみずき」は高収量を得てきたので、今年のような天候でも穫れるのか、湿害があるのかなどについて注視していきたいと語られました。

共励会の表彰式では、意識の高い仲間と情報交換ができて意義深かったこと、父から継いで10年あまり、無我夢中で取り組んで来たことが決して間違いではなく答え合わせができて自信が持てたことなど、お話いただきました。



6月24日播種「そらみずき」(一番手前が水路、その奥が昨年秋の小麦作付時の明渠)



7月10日播種「そらみずき」(遠方に筑波山を望む)